

日本スポーツ人類学会 第18回大会

プログラム・抄録集

期日 2017年3月28日(火)・29日(水)

会場 東洋大学朝霞キャンパス 情報棟



日本スポーツ人類学会

Japan Society of Sport Anthropology

日本スポーツ人類学会第18回大会

■ 主催 日本スポーツ人類学会

■ 期 日 2017年3月28日(火)・29日(水)

■ 会 場 東洋大学朝霞キャンパス 情報棟 304 教室
〒351-8501 埼玉県朝霞市岡 48-1
<http://www.toyo.ac.jp/site/access/campus-asaka.html>

■ 会場へのアクセス

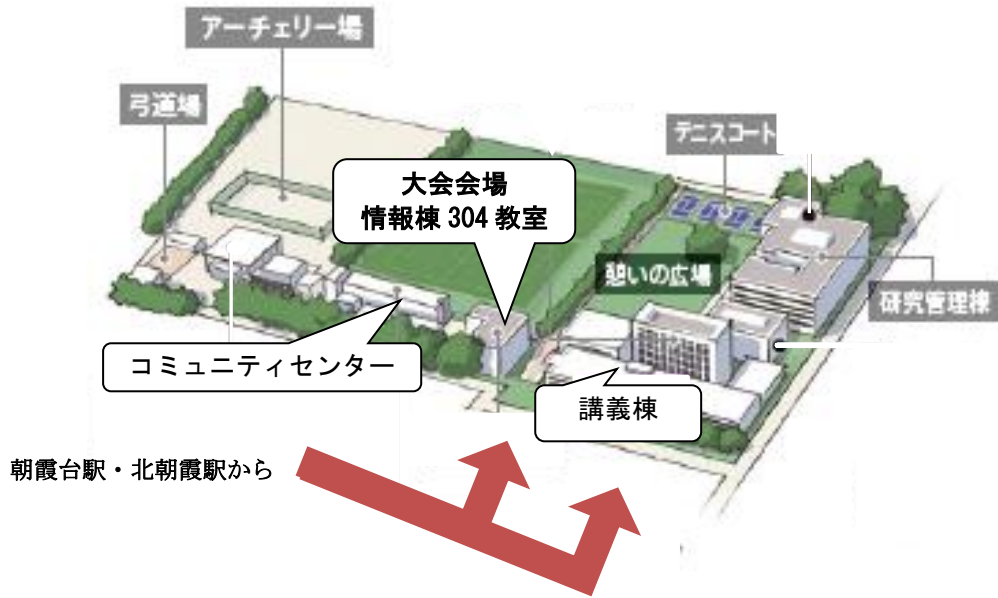
■ 東武東上線「朝霞台」駅北口または、JR 武蔵野線「北朝霞」駅南口より徒歩 11 分

「池袋」から 16 分： 東武東上線 池袋→朝霞台

「西国分寺」から 18 分： JR 武蔵野線 西国分寺→北朝霞



東洋大学朝霞キャンパス 案内図



■ 大会会場

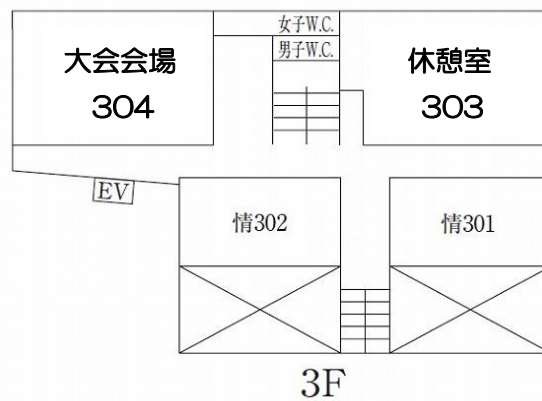
大会会場の情報棟は、コミュニティセンターと講義棟の間にあるコンクリートの建物です。会場の 304 教室は 3 階となりますので、階段またはエレベーターでお上がりください。

※ 指定された場所以外での喫煙はご遠慮ください。

情報棟外観



情報棟 3 階 フロアマップ



大会参加者へのご案内

1. 大会受付

場所 東洋大学 朝霞キャンパス 情報棟 304 教室前
時間 3月28日(火) 12時00分～
3月29日(水) 9時00分～
登録 受付にて参加登録を行い、資料等をお受け取りください。

2. 参加費

参加費(一般4,000円・学生2,000円)を未納の方は納入をお願いいたします。
懇親会(28日18時00分から学生食堂にて)にお申し込みくださった方は会費のお支払いをお願いいたします。

3. ネームプレート

会場内では、ネームプレートの常時着用をお願いいたします。

4. 昼食について

3月28日(火)は11時～14時まで、3月29日(水)は11時～13時30分まで、講義棟1階の学生食堂が営業しています。キャンパス周辺にはコンビニエンスストアがありますが、飲食店はありませんので、朝霞台駅・北朝霞駅周辺の店舗をご利用ください。

一般研究発表者へのご案内

1. 発表受付

発表の受付は、大会受付とともにお済ませください。

2. 発表時間

発表時間は 30 分（発表 20 分、質疑応答 10 分）です。

1 ベル：発表終了 3 分前 2 ベル：発表終了 3 ベル：質疑応答終了

次演者は、前演者が登壇されたら、次演者席にて待機してください。

3. 発表データの作成

会場に用意する発表用 PC の OS とアプリケーションは次のとおりです。ご確認ください、適合する発表データの作成をお願いいたします。

- OS Windows 7 professional
- Appli. Power Point 2013
- Appli. Windows Media Player

- ・パワーポイントを使用する場合は USB メモリに保存したファイルをご持参ください。
- ・データファイルは、会場の発表用 PC にて動作確認を行ってください。
- ・個人用 PC の使用をご希望の場合は、事前に大会事務局までご連絡ください。
- ・Mac ご使用の方は PC と専用ケーブルもご持参ください。
- ・会場に設置されている DVD プレイヤー、書画カメラ〔実物投影機〕も使用可能です。ご自身の発表時間よりも前の休憩時間中に、必ず機材テストをお済ませください。

4. 配布資料

資料の配布をご希望の場合は、60 部ご用意いただき、大会受付にご提出ください。なお、余った資料は 2 日目の大会終了後にお持ち帰りください。

大会プログラム

1日目 3月28日(火)

12:00 ~ 受付

10:30 ~13:00	理事会・編集委員会
-----------------	-----------

1	13:00 ~13:30	メキシコ先住民伝統スポーツのアクチュアリティ (2): 用具にみる「ペロタ・ミシュテカ」の土着性	小木曾航 (早稲田大学)	神戸周 (東京学芸大学)
2	13:30 ~14:00	カポエイラの理念「マリーシア」の読み直し —ロベルト・ダマッタの三元論的視点から—	細谷洋子 (四国大学)	

休憩 14:00~14:10

3	14:10 ~14:40	地域文化が地域スポーツ団体に及ぼす影響について —東京都中央区を事例として—	坂中勇亮 (東洋大学 大学院)	石井浩一 (愛媛大学)
4	14:40 ~15:10	韓国の闘犬と動物愛護団体	李承澤 (早稲田大学 大学院)	
5	15:10 ~15:40	ブルース・リーカンフー文化研究	郭彭 (早稲田大学 大学院)	

休憩 15:40~15:50

15:50 ~17:50	<p>シンポジウム</p> <p>テーマ「西アジアの身体文化—スポーツ・身体認識の多様性—」</p> <p>パネリスト 子島進 (東洋大学) 荒井啓子 (学習院女子大学) 石井隆憲 (日本体育大学)</p> <p>コーディネーター 金田英子 (東洋大学)</p>
-----------------	---

18:00 ~20:00	懇親会 (東洋大学朝霞キャンパス食堂)
-----------------	---------------------

2日目 3月29日(水)

9:00 ~ 受付

6	9:30 ~10:00	撃剣家、舞う —明治期における神刀流剣術の誕生と展開—	田邊元 (早稲田大学)	永木耕介 (法政大学)
7	10:00 ~10:30	近代日本青年団における武道の娯楽性	吉本陽亮 (天理大学 大学院)	
8	10:30 ~11:00	芸能研究の方法に関する考察 —「形」と「座」の関連に着目して—	相原進 (立命館大学)	

休憩 11:00~11:10

9	11:10 ~11:40	北米ネイティブのスポーツ・シンボル問題： 「名誉と偏見」に揺らぐワシントン州立高校の決断	山口順子 (早稲田大学)	田里千代 (天理大学)
10	11:40 ~12:10	近代日本におけるアメリカスポーツの導入と展開	川島浩平 (武蔵大学)	

休憩 12:10~12:20

12:10 ~12:20	編集委員会
12:20 ~13:00	総会

(13:00~ 日本体育学会スポーツ人類学専門領域世話人会)

シンポジウム

西アジアの身体文化ースポーツ・身体認識の多様性ー

パネリスト: 子島進(東洋大学)
荒井啓子(学習院女子大学)
石井隆憲(日本体育大学)

コーディネーター: 金田英子(東洋大学)

【シンポジウムの趣旨】

西アジアにはイスラム教が信仰されている国が多い。イスラム教徒は経典であるクルアーン(コーラン)に書かれた、唯一神であるアッラーの教えを忠実に守って生活している。クルアーンは宗教教義にとどまらず、信仰者の生活や生き方を規定する決まりから政治体制や社会体制の法源にもなっている。そしてそれが従来の文化や風習と結びつくことにより、国家を形成してきた。その結果、一様に見えるイスラム世界も、国や社会によって多彩な価値観や生活習慣の違いを生み出し、さらにはスポーツの世界にも影響を与えることとなった。

そこで今回のシンポジウムでは、クルアーンの中に詳述されている礼拝の意味と身体技法の実演、イランの女性のスポーツ、そして、トルコに伝えられた日本の武道をとおし、西アジアのスポーツ・身体認識の多様性について考えてみることにした。(コーディネーター: 金田英子)

【各パネリストの発表概要】

イスラームの礼拝における身体技法

子島進（東洋大学）

身体技法表演：アブドゥル・ワヒード（マスジド大塚）

イスラームの特徴の一つに、「信仰を具体的な形式で表現すること」が挙げられる。内面的な信仰箇条である「六信」と対になる「五行」すなわち信仰告白、礼拝、喜捨、断食、巡礼がはっきりと定められていることから、その点は確認できる。

五行の中でも礼拝は、とりわけ身体技法の観点から興味深いものである。イスラームの意味は「神に帰依すること、服従すること」であるが、額を地につけるムスリムの姿は、まさにイスラームという言葉を象徴的に示す動作となっている。そして、この平伏礼をサジュダと言うが、マスジド（モスク）の意味は、「平伏する場所、サジュダをする場所」である。この一点からも、身体技法と宗教のエッセンスとの深い関係を知ることができる。



<http://www.islamguiden.com/arabic/etajweed1.html>

本報告では、実際に礼拝の一連の動作を示しながら、解説していきたい。幼少時、ムスリムはどのようにして礼拝の作法を習得していくのか、男女の身体技法の違い、スンナ派とシーア派の違いといった点についても言及する予定である。

現代イラン女性とスポーツ

荒井啓子（学習院女子大学）

イランでは、1979年のイラン・イスラーム革命以降、イスラームの根本聖典『クルアーン』の記述に基づいた国内法によって、女性にヴェールの着用が義務付けられている。イラン女性は親族以外の成人男性に自分の髪や肌を見せてはならない日常世界をもつ。

このようなヴェール文化の中で、1993年、イランのテヘランにおいて「第1回イスラーム諸国女性スポーツ大会」(1st Islamic Countries' Women Sports Games)が開催された。

イスラーム諸国と呼ばれる国々の女性達が集まり、男性の目を遮断しヴェールを脱いで女性による女性のためのスポーツ大会を開催したのである。この大会は、オリンピック参加を模索しつつ4年に1回開催されてきたが、2005年の第4回(The 4th Women Islamic Games)をもって幕を閉じた。しかし、オリンピック・パラリンピックはもとよりアジア大会やユースオリンピックへの参加等、競技スポーツ(=国際スポーツ)への志向性は高まっている。

他方、アスリート以外の女性たちのスポーツ志向も見逃せない。街中にある女性専用のスポーツセンターや女性専用公園（Mother's Paradise）におけるレジャー・レクリエーションとしてのスポーツや余暇活動は、女性達だけの心身の開放的な空間とみることができる。「Sports for All」へのイラン・オリンピック委員会の取り組みも進められている。

イランのヴェール文化には政治的・宗教的な変遷がある。政教一致のイスラーム体制とグローバル化の波の中で、ヴェールをめぐるイラン女性のスポーツ事情は絶え間なく動き続けている。直近（2017年2月）の現地聞き取り調査等の結果を踏まえて報告する。

合気道の伝播と現状－トルコの事例－

石井隆憲（日本体育大学）

トルコの合気道は、トルコ国内で行われるようになって今年で35年目を迎える。1982年に一人の日本人が合気道の指導を始めたことに始まり、現在では、約5000人近くの競技人口がいるのではないかと推定される。

トルコの合気道を見たときにトルコ固有の現象がいくつか見られる。一つ目は、段位の低い者であっても、すぐに合気道教室を開きたがるという点である。もちろん、合気道を行っているすべての人がそうではないが、なかには初段程度の実力で指導者をしていた者もいた。この背景には、合気道がビジネスになるというトルコならではの状況がある。二つ目は国家レベルでの合気道の段位認定システムを2008年に導入したことである。合気道の段位認定は、本来、それぞれの合気道の団体において審査を受けて認定されるものである。しかし、2008年からは段位認定を国家認定資格とし、この認定資格（段位）を取得していない者の合気道指導を禁止したのである。合気道の指導者は団体の段位の他に国家の段位も必要となり、国家の段位を取得せずに指導することは違法行為となった。そのため国家の段位がないままに指導を続けると何らかの罰則が科せられることになったのである（それはまだ実施されていないようではあるが）。三つ目は、トルコにおいて合気道が受け入れられたのは、親日国ということもあるが、もう一方でスーフイズムの影響もあったのではないかとということである。合気道は勝ち負けを競う競技ではなく、修行を続けることによって、その技量を身につけていくというものであり、技量が上がれば上がるほど、神がかり的な技を披露することができる。こうした修行によって、神がかり的な力を手に入れようとする考えは、スーフイズムにも通ずるものがある。そのため、合気道はさまざまな社会階層の人々が受け入れることになったように思われる。

以上のように、本報告ではトルコの合気道の35年を概観し、その中に見られるトルコ固有の現象について紹介し、若干の考察を加えるものである。

【パネリスト紹介】

子島進（ねじますすむ）

東洋大学 国際地域学部国際地域学科 教授

文化人類学、インド、パキスタン、バングラデシュを中心に南アジア地域を調査対象とし、イスラームと開発をめぐる問題やNGO活動などを研究テーマとしている。最近では、フェアトレードにも関心を持っている。

荒井啓子（あらいけいこ）

学習院女子大学 国際文化交流学部日本文化学科 教授

スポーツ人類学、体育・スポーツ哲学、スポーツとジェンダー学を主な専門分野とし、女性とスポーツをめぐる文化論を主な研究テーマとしている。中でも、特に、イスラーム女性とスポーツの在り方に焦点をあてつつ、近年では、オリンピックにおける異文化理解と女性とスポーツの多様性・普遍性に着目している。

石井隆憲（いしいたかのり）

日本体育大学 保健医療学部救急医療学科 教授

ミャンマーを中心とした東南アジアをフィールドにスポーツの研究を進めている。また、武道の伝播と変容にも関心があり、ミャンマーをはじめ、トルコ、ハワイ、ベトナム、インドネシア、シンガポールなどで武道の調査を行っている。

【コーディネーター紹介】

金田英子（かねだえいこ）

東洋大学 法学部法律学科 准教授

日本体育大学、長崎大学を経て、2009年度より東洋大学に勤務。専門は、国際保健（国際学校保健）、感染症対策。調査フィールドは、ネパール、ラオス、タイなど。

3月28日(火)

一般研究発表 No. 1

**メキシコ先住民伝統スポーツのアクチュアリティ (2) :
用具にみる「ペロタ・ミシュテカ」の土着性**

小木曾航平 (早稲田大学スポーツ科学学術院)

本発表は、メキシコ合衆国オアハカ州で発展した「ペロタ・ミシュテカ」の土着性をその用具に着目して明らかにする。ペロタ・ミシュテカはメキシコ先住民伝統スポーツの1つで、片手に装着した約5kgの革製グローブで、およそ900gのゴム製ボールを打ち合う球技である。試合では1チーム5人が縦長のコートに対面し、どれだけ打ち続けられるかを競う。これまで、このペロタ・ミシュテカについてはその起源を問う議論が歴史・考古学分野からなされてきたが、本研究はペロタ・ミシュテカの現在に焦点を当て、比較民族誌的アプローチによってその土着性を浮き彫りにすることを目指している。発表では、ペロタ・ミシュテカの用具の特徴と他の球技のそれとを比較しながら、(1) ペロタ・ミシュテカとメキシコの他の球技やヨーロッパの球技との差異および(2) その差異をもたらす要因について論ずる。

一般研究発表 No. 2

**カポエイラの理念「マリーシア」の読み直し
—ロベルト・ダマッタの三元論的視点から—**

細谷洋子 (四国大学)

本発表では、ブラジル伝統格闘技「カポエイラ」におけるゲームの機軸となる理念「マリーシア」の成り立ちを踏まえ、ブラジル文化の基底理念と比較し、「マリーシア」の読み直しを試みる。

現在のカポエイラの実践において「マリーシア」は「抜け目のなさ」や「ずる賢さ」と訳され、カポエイラをおこなう上で必要な哲学として実践者らに規範や制約を与える。しかし、「マリーシア」はカポエイラの創出当初から意識されていたのではなく、1800年以降に徐々に形成されていった概念であることが、近年の研究で指摘されている。また、ロベルト・ダマッタは、ブラジル社会が「家」と「街路」とその中間の世界の3つの次元から成り立つという「三元論」を提唱し、現代のブラジル人の日常意識にも深く関連していることを指摘している。こうした三元論的視点から、「マリーシア」という理念の成り立ちを踏まえ、「マリーシア」の読み直しをおこなう。

一般研究発表 No. 3

地域文化が地域スポーツ団体に及ぼす影響について —東京都中央区を事例として—

坂中勇亮（東洋大学大学院）

地域スポーツ振興を担う組織として各市区町村の体育協会に加盟する種目別のスポーツ団体が存在する。これらの団体は、地域住民により構成され、活動基盤が地域であるために、地域文化に影響を受けながら組織の運営がなされている。しかしながら、これまで体育協会に加盟する団体の組織運営を考える上で、地域文化が及ぼす影響については着目されてこなかった。

そこで東京都中央区を事例として、中央区体育協会に加盟する種目別スポーツ団体の変遷を論究した結果、1947年に設立された中央区体育協会では、これまで34種目の団体が設立され、地域文化の影響が一因となって6種目の団体が解散または活動休止となったことが明らかになった。

本発表では、地域スポーツ団体の組織運営に地域文化が及ぼした具体的な事例を紹介した上で、今後の組織運営の方法について検討したい。

一般研究発表 No. 4

韓国の闘犬と動物愛護団体

李承澤（早稲田大学大学院）

かつて韓国では動物を使った競技が、闘犬、闘牛、闘鶏、闘馬、闘羊など様々な形式で行われていたが、1991年に制定された法律「動物保護法」によって、その実施が禁止されている。本発表で取り上げる「闘犬」も非合法ながら、しかし、現実には愛好者によって実施され、動物愛護団体からは動物虐待行動と見なされて、激しい反対運動の対象になっている。

こうした愛護団体のクレームに対し、愛好者団体は独自の反論を試みている。それは、闘犬種は闘うために開発された犬種であり、闘犬の実施は犬にとって自然の行動であるというものである。

もちろん、動物愛護団体はこの論理に納得せず、両者の対立は解消しないまま今日に至っている。本発表では、この両者の主張の対立状況について発表する。

ブルース・リーカンフー文化研究

郭彭（早稲田大学大学院）

カンフー文化といえば、映画俳優ブルース・リーが想起される。ブルースは、映画を通じてカンフーのみならず中国武術をも世界へ喧伝したが、彼が創始した截拳道は、未だ中国武術史において評価されてはいない。本発表では、ブルースの登場をそれ以前の中国武術の社会的状況に位置づけ論じたい。ブルース登場以前の中国武術の社会的背景には、日清戦争の敗戦を期に、日本の明治維新を手本とした中国知識人の動きが存在する。梁啓超が提唱した「中国之武士道」言説や、その影響下で展開された、張之江による「国術救国」運動の全国への広がりである。

本発表では、ブルース・リーカンフーを研究対象として、文化変容と文化創造に着目し分析する。具体的には、日本武道思想の中国武術への影響、ブルースの作品内における中国「侠文化」、西洋科学を基としたカンフー身体づくりについて述べる。これらを通じ、カンフー文化を中国武術文化へ位置付けたい。

3月29日(水)

一般研究発表 No. 6

撃剣家、舞う—明治期における神刀流剣武術の誕生と展開—

田邊元（早稲田大学スポーツ科学学術院）

これまで日本の武術史は近世から行われてきた武術が、近代を迎え社会的状況の中で武道として行われるようになった様子を描いてきた。そこでの中心は剣道や柔道であり、近年合気道の研究（工藤，2015）などもみられるようになってきたが、まだ偏りがあるといえる。本発表では武術史の研究成果を踏まえつつ、同時代に撃剣から誕生したといわれる「剣武術（剣武・剣舞）」に着目する。剣武術は今日も行われる「剣舞」に連なるものである。剣舞は、従来自由民権運動の中で現れた「壮士」と呼ばれる人々の、「壮士的实践」の一要素として描かれてきた。しかし、剣舞は「壮士」に受容されるだけのものではあったのか。本発表では、明治期に勢力を持っていたとされる神刀流剣武術とその創始者である日比野雷風に着目し、その実践内容を押さえ、その創始と展開を武術史に位置付けることを目指す。

一般研究発表 No. 7

近代日本青年団における武道の娯楽性

吉本陽亮（天理大学大学院体育学研究科）

青年団（青年会・少年会を含む）とは、明治20（1887）年前後に、各地で自主的・自発的に誕生した社会集団組織である。本研究では、明治37～38（1904～1905）年の日露戦争以後、国家により統制され、「官制化」された青年団において武道がどのように受容されていたのかを、各地の市町村史、風俗史等の史料から考察する。

青年団における武道は、試合に勝つことの「楽しさ」を求めるといった娯楽性に加えて、競技性を追求するという姿勢がみられた。また、青年団の武道の試合には「観客」が存在した。試合は各地区の運動会の一部門として開催されることが多かった。運動会では、武道の試合だけではなくその他の競技においても、観客（応援者）が選手に声援を送り、村人共々試合を楽しみ、地域の一体感を醸成するという機能もあった。このことは、当時武道の統括団体であった大日本武徳会が主催する武道試合の神聖で厳粛なるものとは異質なものであった。

一般研究発表 No. 8

芸能研究の方法に関する考察－「形」と「座」の関連に着目して

相原進（立命館大学）

芸能研究においては、演者の所作・衣装・台本などの「形」と、芸能を演じる社会集団や芸能をめぐる環境などとの関連について、方法論上の解決ができていないまま今日に至っていると思われる。発表では、「形」については郡司正勝や守屋毅らの「形」をめぐる議論および、源了圓による「形」と「型」に関する考察などに着目し、芸能を演じる社会集団や芸能をめぐる環境については林屋辰三郎による「座」の概念を中心に考察する。

それらを踏まえた上で、「形」と「座」について、芸能研究における方法論と技術論という区分を設ける。方法論上の問題としては、概念としての「形」と「座」との関連を解明することを提起する。一方、技術論上の問題としては、演者の所作・衣装・台本などの「形」を実態に即して解明し、そして芸能を行う芸能集団や芸能をめぐる環境については調査や資料を通じて解明した上で、「形」と「座」との関連について考察することを提起する。

一般研究発表 No. 9

近代日本におけるアメリカスポーツの導入と展開

川島浩平（武蔵大学人文学部）

アメリカ合衆国にルーツを有するベースボール、アメリカンフットボール、バスケットボール（三大スポーツ）をとりあげ、19世紀を通じてアメリカでそれぞれが考案されたときの理念やビジョンが、明治、大正、昭和期の日本に導入され普及する過程で、どの程度継承され、どのように変容を遂げたかを検証するための準備的な考察を行うものとする。ベースボールに関する文献は少なくないが、アメリカンフットボール、バスケットボールに関しては十分とはいえない。三大スポーツの日本での展開に関する情報量の不均衡をどのように補うかについても検討する。発表では、三大スポーツが考案されたころの理念やビジョンに言及し、これらの競技が日本でどのように導入され、普及したかについて概況を述べ、今後の調査の課題を整理する。また、ここからトランスナショナルなスポーツ史記述へと発展させるための問題提起を、文化史や社会史の観点を取り入れながら試みるものとする。

**北米ネイティブのスポーツ・シンボル問題：
「名誉と偏見」に揺らぐワシントン州立高校の決断**

山口順子（早稲田大学スポーツ科学研究センター）

本研究は、第 17 回大会で発表した「北米ネイティブ Salish 語族におけるスポーツ・マスコット撤廃のジレンマ」の継続報告である。今回は、「レッドスキズ」マスコットの「プライドか偏見か」をめぐる部族の選択を北方に生きるネイティブに固有な「身体技法」と合わせて報告する。

本研究の独自性は、全米における「ネイティブ VS. 非ネイティブ」にみられる構図ではなく、同じ一つのコミュニティにおけるネイティブ間の「名誉か偏見か」の葛藤に注目した点にある。さらにスクールおよびスポーツチームのシンボルマークからの撤退を、ワシントン州立 PT 高校の「マスコット問題検討委員会」が公開した報告書とスクール・ボード（評議会）の決断から追いかけたものである。

ちなみに当該高校のレッドスキズ・モチーフは、1926 年からの長い歴史を有していた。2013 年に撤退を決断したスクール関係者（選手、コーチ、在校生、卒業生、並びに地域市民等）の決断はどのようなものだったのか。

日本スポーツ人類学会第 18 回大会組織委員会

大会会長：石井隆憲

組織委員：松尾順一、金田英子、谷釜尋徳、木内明

日本スポーツ人類学会第 18 回大会事務局

〒351-8501 埼玉県朝霞市岡 48-1

東洋大学ライフデザイン学部木内明研究室内

【TEL / FAX】 048-468-6362（直） 【E-mail】 supojin18@yahoo.co.jp